HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中央アジア絨毯コレクションの形成 ： 帝政期およびソ連期の民族学的調査の比較
Author(s)	志田, 夏美
Citation	日本中央アジア学会報, 18, 58-60
Issue Date	2022-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.18.58
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91611
Type	journal article
File Information	JB18_012shida.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

中央アジア絨毯コレクションの形成
―― 帝政期およびソ連期の民族学的調査の比較 ――

志田　夏美

本研究の目的は、「遊牧民の伝統」といわれる平織り絨毯からウズベク牧畜民の生活誌を描きだすことにある。従来、商業的にも学術的にもオアシス定住民文化に注目が集まってきたウズベキスタンの人々の多様な帰属意識や文化を明らかにすることを目指している。

現在のウズベキスタンの領域では、様々な民族部族が絨毯生産に従事してきた。現地研究者 E. Gyul′［2019］によると、ウズベキスタンの主要な絨毯生産地および生産者は、サマルカンド地域のウズベク諸集団、ヌラタ山間部のウズベク・トゥルクマン、カシュカダリア草原のアラブ、フェルガナ盆地のクルグズ、スルハンダリア州のコングラト（ウズベク）で、なかでもコングラトは平織り絨毯の製法を最も豊富に伝える集団であるという。けれども、彼女らはソ連期には調査対象とならなかった。なぜなのか。本発表では、中央アジア絨毯がどのように研究されてきたのかを確認した上で、帝政期の調査との比較を通じてソ連期の調査のあり方について考察した。

中央アジア絨毯研究は、帝政ロシア併合を機に本格化した。概ね、現地で標本資料を収集し博物館に所蔵すると、その製品群を分類整理することに終始してきた。本発表で扱う一次資料は、それらを収集した 2 人のロシア人民族学者によるものである。現地調査の実施時期に応じて帝政期とソ連期に区分した。前者は、ロシア人類学・民族学博物館のコレクションを収集した S. M. Dudin（調査時期 1900 ～ 02 年）の研究論文［1928］と報告書［2021（初出 1903）］である。後者は、中央アジア諸国の博物館コレクションを収集した V. G. Moshkova（調査時期 1929 ～ 46 年）の著作［1970］[1]である。

中央アジアのバザールでロシア商人が購入した絨毯は、オレンブルグを経由してロシアそしてヨーロッパへと渡った。当時、中央アジア絨毯は商人の購入先に応じて「ブハラ（bukharskii）」、「テキン（tekinskii）」、「カシュガル（kashgarskii）」という貿易品目名で識別されていた。前者は、コーカサス経由のペルシア絨毯と区別するものでオレンブルグ経由の絨毯

[1] 本書は、博士論文の執筆途中で病没したモシュコヴァの学術的草稿（ウズベク共和国科学アカデミー歴史・考古学研究所蔵）をもとに編纂・出版されたものである。

全般を指し、そのうち品質的に優れたものがテキン絨毯(2)として区別された。後者は、主に東トルキスタン産の絨毯を指した。中央アジア最大の絨毯バザールはブハラにあり、そのほかサマルカンドやヒヴァ、コーカンドなどの都市にも絨毯が集まった。「ウズベキスタンは絨毯の生産国ではなく消費国である」といわれる所以である。都市部では絨毯生産は行われておらず、近郊の農村や草原地帯から持ち込まれたものや近隣諸国の製品が売られていた。

現地調査により現物標本とともに生産者と生産地の情報がもたらされると、中央アジア絨毯は生産者の集団名を冠して識別されるようになった。帝政期の民族学者が示した分類は、デザインや品質を根拠とするものであり、ソ連期に整えられていく民族区分とは異なるところがあった。一方、ソ連期の民族学者は、地域や部族ごとに異なる特色を記録しながらも官製の民族に帰属させるかたちで体系化した。今日継承されている分類法はソ連期のものである。

またソ連期の調査は、中央アジア全域の絨毯生産地を踏査することを目的としていたが、コングラトのもとには訪れなかった。発表者は、これをソ連期特有の調査対象の偏向とみて、まず、調査対象となった集団が商品用絨毯の生産者ないし民族起源論の解明にデータ的に寄与する生産者である点を指摘した。その上で、自家用絨毯を小規模にしか作らないコングラトの絨毯づくりは商業化していない点で「発展」しているとはみなされず、調査対象から除外された可能性があること、あくまでコングラトという部族的識別はウズベク民族の下位概念であり重要視されなかった（他のウズベク諸部族と同一視された）可能性があることを指摘した。

しかしながら、本発表の質疑応答で、商業化や「発展」と調査対象の偏向を結びつけることについて疑問視する意見もいただいた。他の民族手工芸の場合もふまえて再度検討を試みたい。

さいごに、従来の研究の問題点と今後の展望を述べる。旧ソ連圏の研究では、絨毯製品やその作り手を集団単位でしかとらえていない。ソ連期には生産現場に直接赴く研究手法がとられたものの、人間を標本のように扱ったために分類整理に終始する研究の域をでることはなかった。発表者は、今後実施するフィールドワークで、官製の集団単位の枠組みにとらわれない議論を進めることを念頭に、あえて現地博物館等で発信される民族イメージを見聞しつつ、作り手と生活をともにすることで、外側の視点を意識した内側の視点を観察したいと考えている。その際、絨毯づくりは、牧畜民のアイデンティティと「知」の体系を学ぶ手がかりとなるはずである。

(2) トルクメン諸部族の一つテキンに由来する。テキン絨毯は概ねトルクメン絨毯と解することができるが、品質的に優れていないものはウズベク絨毯に含まれることもあった。

参考文献

Dudin, S. M. 1928. “Kovrovye izdeliya Srednei Azii,” *Sbornik Muzeya antropologii i etnografii* 7, pp. 71–166. [online] http://raretes.ru/biblioteka/dudin-kovrovye-izdeliya-sredney-azii/

———. 2021. *Otchet S. M. Dudina o poezdkakh v Srednyuyu Aziyu v 1900–1902 gg*. Moscow: Mardzhani.

Gyul′, E. 2019. *Kovry Uzbekistana: Istoriya, estetika, semantika*. Tashkent: Art Flex.

Moshkova, V. G. 1970. *Kovry narodov Srednei Azii kontsa 19 – nachala 20 vv*. Tashkent: Izdatel′stvo “FAN” UzSSR.

（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）